



Sponsor a Child

クリスチャンパートナーズ

通信第 101 号

-
- | | |
|---|-----------------------------------|
| ・発行日／2018年03月05日 | ・発行所／クリスチャンパートナーズ |
| ・事務局／〒422-8053 静岡市駿河区西中原
2-7-63-111 竹澤三佳子方 | ・Tel／Fax 054-283-1721 |
| ・郵便振替口座／00150-0-134994 | ・e-mail／sunflower818@hw.tnc.ne.jp |
| | ・http://www2.wbs.ne.jp/~c-p/ |
-

ラオスとミャンマーを訪問して

理事長 木ノ内一雄

ミャンマーはかつてのビルマで、映画「ビルマの豎琴」を懐かしく思い出します。現在では国家顧問のアウンサンスーチーさんでよく知られている国です。風景は日本とよく似ていて、田んぼとそのはるかかなたに山々が連なる緑の美しい国です。人々は素朴でつつしみ深く、心が温かい感じがします。同じことはラオスについても言えますが、北から南へ流れるメコンの悠久の流れが郷愁を呼び起こします。

昨年9月18日から27日にかけて両国を訪問しました。いずれも初めての国でした。旅程は最初にラオスの首都ビエンチャン、そこから空路ルアンパバーンに行き、ミャンマーのマンダレーに飛び、陸路5時間かけて車でラシオ、そこから空路ヤンゴンに行って帰国しました。目的はCNEC(Christian Nationals' Evangelism Commission)シンガポール事務所からメコン河流域の子どもたちへの援助が求められていたからです。(以後：CNECシンガポールと略す)

両国とも、病気などで親を失った子どもたちが多くいます。また、多民族国家で、山岳地帯では部族間の抗争が絶えず、それも孤児を生む大きな要因となっていました。子どもたちを受け入れる施設には、政府、仏教及びキリスト教団体などがありますが、その数は限られています。その中で、シンガポールCNECは戦後、米国などの支援を受けて子どもたちを援助してきました。施設では子どもたちに聖書と賛美歌を教え、学校に行かせますが、近くに学校がない場合は施設内で国語や中国語、英語、公衆衛生などを教えます。大きな施設では中学、高校などを併設し、近隣の子どもたちにも勉学の機会を与えると同時に、優秀な子どもには国内外の大学や神学校への進学の手助けをしてくれました。

両国とも国境を中国と接しているため、北に行くほど中国人が多くなります。孤児にもそのことが言え、上の学校に進む子どもに客家(はっか)の子どもが多いのに気付かされました。漢族に属する客家は中国東北部の王族の末裔で、秦の時代から



施設で学ぶ少女→

南下の歴史が始まったと言われています。現在、東南アジア諸国に一億二千万人を数え、華僑の三分の一を占めるそうです。有名人には孫文、鄧小平、リー・クアンユーなどがあり、CNEC シンガポールの職員もほとんどが客家と聞きました。

施設から大学、あるいは神学校に進んだ子どもの多くは、児童養護施設や学校の職員となったり、CNEC シンガポールの支援を受けて、自らも施設や学校を立ち上げています。子どもたちの信仰は単純で『あなたがたは神に愛されている子供ですから、神に倣う者となりなさい。キリストが私たちを愛して、ご自分を香りのよい供え物、つまり、いけにえとしてわたしたちのために神に献げてくださったように、あなたがたも愛によって歩みなさい』(エフェソの信徒への手紙5:1~2)との聖書のみ言葉をそのまま素直に受け入れていました。部屋の中の少年→



以前、欧米人宣教師の多くは現地の人の中に入って宣教しようとしたのですが、言葉や習慣、気候などの違いは大きく、母国の宣教団体の負担も大きいため、CNEC シンガポールのような現地の宣教団体を支援した方がより多くに実を結ぶことが分かりました。現地のキリスト教指導者は自国の言葉だけでなく、中国語、英語も堪能で、ラインなどを通じて国内だけでなく、世界中の人たちと無料で話をすることができます。中国人、特に客家の人たちのこのような能力は認めなければなりません。中国系の人たちを助けて、現地の人を支援するのに躊躇される方もあるかと思いますが CNEC シンガポールの人たちだけでなく、現地の中国の人たちも私たち日本人と一緒に働くことを願っているのを、今回の旅で知らされました。また、ラオスやミャンマーの人たちの日本に対する期待も大きく、今こそともに働くべき時だと思われました。

両国とも鉄道が整備される前に道路ができ、トラックや乗用車による貨物や人の異動が始まりました。通信手段も固定電話が設置される前に携帯電話やラインを用いるようになりました。長らく停滞していたメコン河流域も様々な外国資本が入り、社会が急速に変化し、活気が生まれています。それとともに子どもたちへの教育の必要性は以前にも増して高まっています。変わって行く世界の中で彼ら自身がそのことに一番気が付いているのではないのでしょうか。学んでいる子どもたちの姿に、そのことを感じました。私たちは今まで西カリマンタンの子どもと学生の学資援助をしてきましたが、アフリカのガーナと共に、この地域にも学費援助の輪を広げる必要を痛感させられたのが、今回の訪問でした。両国ともに仏教国ですが、キリスト教に根差した教育が、よりよい社会を築く礎になると信じます。キリストによって救われた人たちは、自分の両親を殺した他部族の中へすら入って行こうとします。主イエスによって救われた感謝は、敵ですら愛する人に生まれ変わらせるからです。



理事長が訪問した養護施設の一つ。左端二人目が理事長。

帰国された高橋宣教師からのご挨拶

アンテオケ宣教会インドネシア宣教師 高橋めぐみ

昨年10月末に、17年間のインドネシアでの働きに区切りをつけて帰国いたしました。今日まで長い間、皆様からカリマンタンの子どもたちを支援していただきましたことを、心より感謝いたします。私は帰国しましたが、現地には信頼できる寮の舎監や教師たちがおり、連絡を取りながら支援を継続しています。また、私も年一、二度は現地に行く予定ですので、今後もカリマンタンの子どもたちへのお祈りとご支援を継続していただけたらと願っております。

宣教師として、現地の子どもの傍らに立って、彼らの現状、願い、苦勞、そして努力を見ることができたのは、現地にいる者の特権であったと思います。しかしそれと共に、私一人では現地の多数の子どもの必要（特に経済的な）に応えることができなかったのも事実です。それゆえ、クリスチャン パートナーズの皆様と手を取り合って、多くの子どもたちを支援してこられたのは、本当に幸いなことでした。理事会が毎年予算枠をとって下さったので、支援が必要な子どもたちに出会った時に、迅速に奨学金支援を始められましたし、卒業するまで継続して支えていただけたことは、彼らにとって大きな助けになりました。

私が出会ってきた子どもたちを全部ご紹介できませんが、その一人ドノのことを書きたいと思います。彼は、マレーシアとの国境近くの山奥にあるバタット・ラマ村の出身です。私は彼を中学生の時から知っていますが、父親を早く亡くし、母親も病気がちで貧しい家庭で育ちました。彼の夢は看護師になることでした。村には診療所も薬もなく、人々が病気に苦しんでいるのを見てきたからでした。ある時、薬売りが来ましたが、薬は高すぎて村人には買えず、まじない師の所に行くしかなかったのです。それでドノは、将来看護師になってこの村を助けたいと強く願ったのでした。

彼は中学を卒業してから、私が住んでいたアンジュンガンまで出てきて、ATI 神学校で炊飯の仕事をして高校に通いました。朝4時半から、神学生120人分のご飯を鍋で炊く仕事です。それを朝夕して、神学校から彼がもらえるのは月額1500円だけでした。高校の学費が月350円、通学バスが月1100円で、彼の1か月の収入は消えてしまいます。それでも食べることができ住む場所があって、高校に行けて感謝していると言っていました。



ドノ

私は、ドノの他に4名の高校生の日々の必要を見て、毎月1千円の援助をしましたが、「石鹸などの生活必需品や、学業のコピー代に使える・・・」と何度もお礼を言っていました。穴の開いた靴を履きながら、少しずつ節約して買い替えたりもしていました。私は千円が彼らにとってそれほど価値があるということを見て、神様から任されている経済を賢く管理して、価値あることに使わねばと思われました。

ドノは看護学校へ進学する志を変えず、真剣に祈っていましたが、看護学校の学費は普通の大学の三倍なので、経済の壁が立ちました。その姿に心を動かされた私は、クリスチャン パートナーズに彼を紹介し、学費の一部を支援していただけるように橋渡しをしました。そして昨年8月から、ドノはベテスタ看護学校に進学することができました。彼は今、神様と支援してくださっている方々に心から感謝して、真剣に学んでいます。私は、やがて彼が看護師として、奥地の村々で働く日が来るのを楽しみにしています。



高橋宣教師を囲んで：

アンジュンガン神学校に寄留する高校生たち。

ドノは男子たちの右端

高橋先生の右はダミ

(元大学院奨学生、神学校でインドネシア語を教えています。)

続 ガーナ活動報告 2016 年次の写真



←支援金で山羊の頭数が増えました ↑

ヤマ養護施設の小学校は近隣の子どもで超満員

【理事会報告】第 199 回理事会は 2017 年 10 月 23 日開催の予定であったが、台風のため延期。2017 年 11 月 06 日（月）一ツ橋学士会館で開催。2017 年 07, 08, 09, 10 月度会計報告承認。会則改訂について協議し、次回に新案提示予定。監事として、会計整理を長年していただいている高塚佳美氏への依頼を竹澤理事が行ったが、回答は得られていない。「通信」101 号には理事長のラオス・ミャンマー視察旅行、帰国された高橋めぐみ宣教師に、活動の総括と今後の支援について書いていただく。ガーナの山羊飼育などの写真追加の予定。

第 200 回理事会は 2018 年 01 月 22 日（月）一ツ橋学士会館で開催。2017 年 11, 12 月度会計報告承認。新会則についての協議は、監事未定のため延期。ホームページの作者石久保善幸氏引退で、引継ぎされる方と竹澤理事が面談する。「通信」第 101 号の内容には変更なし。SAC 里子は西カリマンタンの子どもに限定することを確認し、現在 16 名である。高橋宣教師から提示された現在までの奨学金配布状況をもとに、今後のことを協議。（理事会開催前に高橋宣教師をお招きして会食し、労をねぎらった。）

第 201 回理事会は 2018 年 3 月 19 日（月）一ツ橋学士会館で開催。

（編集後記）故草野理事長の依頼で、ホームページ作成を続けてくださった石久保善幸氏が引退されることになりました。長年のご協力を心より感謝いたします。同氏のご推薦で、101 号から高須淳氏がお手伝いくださることになりました。若い年代の方から、新鮮な提案をいただけることと期待しています。

大学院を修了されたダミさんに替わって、ドノ君の支援へと移ります。高橋宣教師を通しての奨学金支援活動が、末永く続きますように。またラオス・ミャンマーの養護施設に生活する子どもたちのためにも、皆様のご協力をお願いいたします。大雪のためご苦労された方々に、暖かい春日が早く来ますように。主の守りを祈ります。

鳥海百合子